

SER no.050; 総括

著者	毛里 和子, 大林 太良
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	50
ページ	279-286
発行年	2004-03-29
URL	http://hdl.handle.net/10502/1769

総 括

毛里 和子

一つの基調報告、18のペーパー、それへのそれぞれのコメントという実に内容豊かな今回のシンポジウムに参加して多くのことを学ぶことができたことに対して、まずお礼を申し上げたい。

政治学・国際関係学から中国の民族やエスニック・グループの問題にアプローチしている総括発言者としては、中国、ヨーロッパ、アメリカ、ロシア、韓国、そして日本の民族問題の著名な専門家が参集した今回のシンポジウムにコメントするのはとても荷が重い。だが、シンポジウムのタイトルに文化、政治、経済という言葉が入っているので、あるいはコメントする資格も少しはあるかも知れない、と思い直すことにした。いずれにせよ、的はずれのコメントになってしまうのではないかとおそれながら、また大変失礼ながら18人すべての方の報告をうかがっていないことをお詫びしながら、今後の議論を活発にさせるためにいくつかのコメントをしたい。

まず、中国政治を研究しながら民族問題に関心をもってきた私がつねづね疑問に思ってきたことがあるので、それを上げておきたい。

第一に、1950年代前半から、中国の民族政策は平等を旨とし、民族をわざわざ発掘し、民族文字をわざわざ作り、民族幹部をわざわざ養成し、民族言語教育を精力的に進め、相当なエネルギーを費やして数十のエスニック・グループに新たに「民族」のステータスを与えてきたが、なぜそうしたのだろうか。彼ら（端的に言えば「辺境の部族」）を中華人民共和国の一員にするためにこの複雑で煩瑣なプロセスがどうしても必要だったのだろうか、それとも当時の「師」ソ連のやり方をそのまま持ち込んだのだろうか。

第二に、そもそもチベット人、モンゴル人、あるいはウイグル人のような人々と、1979年に初めて認知された雲南のジノー（チーヌオ、チノーとも表記する）人（人口2万人）とは同じレベルの民族、政治的共同体なのだろうか。エンゲルスが言う「歴史を担う民族」と「歴史なき民族」の理論的当否はここでは問わないが、現実に漢民族と対抗する歴史をもつ民族と、中央権力と何の関わりもなくひっそりと辺境に暮らしてきたエスニック・グループを政治的に同じにはどうしても扱えない。中国の民族平等政策は、非漢民族すべてを同列に扱い、一括りに「少数民族」としたが、そこに何らかの政治的意図はなかったのだろうか。少なくとも、結果的にはかなり政治的な意味をもったのではなかったか。

第三に、中国では今日まで民族が絡む紛争のほとんどすべてが「民族分裂（ないし分離）主義」とされているが、そもそもエスニック・グループはいつも民族の分離や国家

分裂、独立を求めたのだろうか、そうでないとしたら、なぜすべてを「民族分裂主義」として排撃するのだろうか。民族をめぐる紛争の中身は実は一様ではなく、分裂主義と一括りにする背景にはつねに政治的意図が働いているのではないか。

第四に、冷戦後のいま、ヨーロッパなどでの「エスニック・リバイバル」現象が指摘されることが多いが、はたして昨今の現象は「リバイバル」なのだろうか、実は新しいエスニック現象なのではないだろうか、という疑問である。おそらくは、脱冷戦によって旧「帝国」のくびきから離脱し、古い国家的・民族的枠組みやアイデンティティを回復しようとする動きもあるだろう。しかし、たとえば中国でのように、市場経済によって自らのアイデンティティが失われていく危機感にとらわれたエスニック・グループの反発や、権利意識にもとづく新たな「異議申し立て」など、さまざまな内容があり、これらを区別する必要があるのではないかとともに考える。

以上のような疑問を解くためのヒントが少しでも得られればと考えて今回のシンポジウムに参加したので、報告とディスカッションにあつい期待をもってきた。期待にたがわず、多岐にわたった報告はそれぞれに意欲的で、野心的で、貴重なヒントが得られた。

とくに、報告と討論の中で、エスニック・グループと民族についての議論、中国における1950年代の民族識別の「やり直し」や「未完成」などについての新しい指摘、また、中国における双語政策は、実は民族語政策というより、漢語を普及させるという意味で成果をあげてきたのだという逆説的な説明、などに非常に啓発された。以下に、いくつかの点について感想を述べ、総括発言者の責を少しでも果たしたい。

まず、江平、郝時遠、果洪昇、洪時榮各先生の中国側報告について感じた点を指摘しておきたい。

第一に、そもそも「民族」のあり方と国家の成り立ちに不即不離の関係があるにしても、中国の方の発言では、とくに国家の役割、国家との関係が強調されているのが印象的だった。しかもその場合、民族のあり方との関係で、中国の理解では、国家は先進国と植民地の二つだという、いわば「二元論」の立場に立っているように観察された。だが、民族やエスニック・グループを考える際の「国家」は実はもっと多様ではないのだろうか。少なくとも、(1) 旧植民地保有国、現在の先進国、(2) 旧植民地（中国やインドネシア）、(3) 「帝国」をそのまま継承して国民国家になった国（旧ソ連や中国）、(4) 移民国家（アメリカ合衆国など）の四種類の「国家」を考える必要がある、それらの国家の成り立ちがそこに住む民族やエスニック・グループのあり様に大きく影響していることを見落とすべきではないと思う。

第二は、アイデンティティの多様性にかかわる問題である。中国の場合、とくに費孝通の「中華民族」論に見られる顕著な特徴は、長い歴史で形成されてきた文化的アイデンティティと政治的アイデンティティが別のものとして捉えられていないように思われ

る。文化的アイデンティティが自生的で自然に形成されるものであるのに対して、政治的アイデンティティは国家との関係で生ずる、きわめて人為的なものではないだろうか。しかも、ある中国側報告によれば、政治的アイデンティティは日中戦争、中華人民共和国の成立によってすでに解決済みだ、とされている点にも違和感を覚えた。この点は、中国における「国民形成」にかかわるポイントだと私は考えている。中国がいう愛国主義、ナショナリズムが、ともすれば、文化的ないし種族的アイデンティティに依拠し、あるいは外来の圧力を契機に形成されたもので、政治参加や権利意識、中央権力に対する「帰属意識」を欠いている点が、中国が依然、「発展途上の国民国家」であるといわれる（北京大学、寧騒）ゆえんだと思われるのである。

第三は、中国は近代西欧の概念であるナショナリズム、国民形成、国民国家という枠組みでは説明できない、とする中国の「特殊性」をめぐる議論である。この点について、ここで詳しくふれることはできないが、近代そして現代中国のリーダーたちがずっとモデルにしてきたのは、実はリジットな「理念型国民国家」以外のなものでもなく、少なくともリーダーたちの頭の中では国民国家は「虚像」でも何でもなかった、と私は考えている。その主観的な目標が妥当かどうか、可能かどうか、その点が問われるべきだろう。

以下、興味深かった論点や視点をいくつか上げておきたい。

1. 諸エスニック・グループ間の歴史的・民族的ヒエラルヒーの存在、そしてそのために国家、中央政権に対する態度が異なるという点を指摘したハンセン教授の報告は大変興味深かった。中国の民族関係は、主要民族である漢族もしくは中央権力と少数民族一般の二項対立的な対抗関係だ、という単純な構図では捉えられないこと、アイデンティティもまた歴史的に形成され多様な内実をもつこと、などを明らかにしてくれたと思う。

2. 旧ソ連と中国の民族理論、民族状況の比較を念頭におきながら、スターリン・テューゼの影響を受けた中国の民族理論や民族識別がさまざまな問題を抱えており、したがって、「民族」についての理論的な吟味が依然必要である点を強調したクリュコフ教授の指摘も大事である。文化とエスニシティについての昨今の議論が理論的な視界を切り開くかもしれないとクリュコフ教授は述べたが、私も新しい視座に大いに期待したいと考えている。とくに「エスニシティとその他の各種の社会的集団との間にいかなる相違点があるのか」という問いに今後の研究が是非答えてほしいと思う。

3. 「先進国が学ぶべきだ」という声もある中国の双語教育についての庄司氏の逆説的見解も示唆的だった（庄司 2003）。少数民族言語政策、それによって生まれた新文語が、民族工作者の努力や期待とはうらはらに、むしろ漢語普及の面で成果を上げた、という指摘は、1950年代の中国の「進歩的民族政策」を考える上で重要な視点かも知れない。

中国は少数民族の自決権を奪った代償として多文化主義、文化的寛容政策をとった、とするのはきびしすぎるにしても、民族の文化的アイデンティティ維持と経済レベルの向上との間には、そもそも避けがたいジレンマがあるのではないだろうか。昨今の市場経済の浸透で、一方でエスノ・ナショナリズムが高まり、他方で、経済的利得から漢語教育になびいていく民族が多くなっている状況を見ると、なおのこと、そのジレンマの重みを痛感する。

4. ヘーベラー氏が討論で指摘した、アイデンティティを政治的アイデンティティ、文化的アイデンティティ、経済的アイデンティティなどにいったん解体して捉え直す必要があるという指摘に私は共鳴する。「民族問題」の（克服とはいわないまでも）緩和のためには、その論理的な切り離しがかなり役立つのではないかと考えているからである。1996年夏にウランバートルで、一部で伝えられる「モンゴル統一」の動きをどう思うか？という質問に対して、モンゴル国家と「モンゴル文化の屋根」とはまったく別のものだ、という答えが返ってきたことを思い出している。

いずれにせよ、今回の充実したシンポジウムは、最初に上げた私の「四つの疑問」のうちのいくつかに貴重な示唆、間接的な答えを与えてくれた。報告者と討論者に心から感謝したい。

参考文献

庄司博史

2003 「中国少数民族語政策の新局面」『国立民族学博物館研究報告』27(4): 683-724。

総 括

大林 太良

政治学の立場からの毛里さんの総括に続き、私は民族学の立場からの総括をしたい。民族の問題は民族学にとって極めて重要な問題である。このことは1930年代に白系ロシア人で中国に滞在していたシロコゴルフ、ドイツのミュールマンの先駆的研究があり、我が国ではほぼそのころから岡正雄によって論ぜられるようになった。このように戦前からとりあげられてきた問題ではあるが、今回東アジアを中心として民族の問題について民族学ばかりでなく他の学問からも参加者を得て、学際的なシンポジウムが催されたことは、大変意義深いことである。そして私はこのシンポジウムに招かれたことを大変嬉しく思っている。

このシンポジウムでは18の報告があり、多くの問題点が指摘され、論ぜられた。もちろん私の総括のなかで、そのすべてについて触れることは不可能である。私がことに関心をもっている問題に限って取り上げることにはしたい。その際、毛里さんが大きく一般的に問題点を整理されたので、私はそれを補う意味で、細かい具体的な問題点を取り上げ、ことに今回のシンポジウムの結果として残り、引き継がれ、発展されるべき収穫は何だったのか、ということに重点をおいて述べることにしたい。

第一に、東アジアに民族問題が存在するという点に関しては、すべての参加者が一致して認めている。しかしその民族問題の内容と解釈については、中国からの参加者と、その他の参加者とのあいだに、まだ相当のギャップや相違が存在するように見える、というのが私の率直な印象である。ことに民族のアイデンティティの問題については、中国の学者よりもむしろそれ以外の学者のほうが強調する傾向があるように見える。そういうところに、今後東アジアにおける民族問題を研究する場合、考えるべき重要な問題点の一つがあることが、このシンポジウムで分かったのではないだろうか。これが収穫の一つである。

第二に、民族問題を研究する場合、地域の歴史、かなり限られた範囲の地域の歴史の研究が必要であり、また地域の歴史の知識を問題の解釈に利用する必要があることが、今回のシンポジウムで、ことにハンセンさんのすぐれた報告で明らかになった。毛里さんが取り上げられ、またクリューコフさんや松本さんの報告でも論ぜられた民族識別の問題についても、もちろん一般的にそれがどこまで妥当かという問題があるが、多くの人がもつともだと思ふ結果をだすためには、地域の歴史の研究が必要なことは、いうまでもない。たとえば私が興味をもっている雲南省南部のクツオン人についても、地域の歴史の研究が必要である。クツオン人の少なくとも一部にかんしては、今の居住地に住むようになったのは、19世紀から今世紀にかけてであるといわれている。このような移

住の歴史の研究が必要である。また雲南省南部、ことに西双版纳ではタイ族の土侯国が存在しており、そのもとでさまざまな民族が生態学的条件や生業形態、また相互の力関係などに従って棲み分けもするし、互いに他との関係で特殊化もしてきた。クツオン人の場合、その一部は、より採集狩猟民化するという形での特殊化が行われた。同じ土侯国内部での他の民族との関係において特殊化が進行したのである。そしてそれに伴って我々意識も出てきたかもしれない。また自称のような問題も出てくる。したがって、このような地域の歴史の研究との関連で、個々の民族識別の問題も考え直してみる必要があるかもしれない。

第三は教育の問題である。今回のシンポジウムでは教育の問題がいろいろ取り上げられた。しかし従来少数民族にたいして教えられて来たことは、お前たちはかつては大変遅れていたとか、お前たちがやって来たことは迷信である、というような過去の否定的な面の強調が少なくなかった。しかし、これではあまり悲しいではないか。これから民族として発展するためには、自民族について誇れるようなことがほしい。誇りを高めることができるようなものがほしい。その意味で面白かったのは、横山さんの報告である。白族の藍染めは、かつては白族自身は田舎臭いつまらないものだと思っていた。それが外国人観光客によって価値を認められた。そしてそれを通じて白族も誇りをもつようになった、ということが報告された。これは大変重要な点である。たんにこれに止まらず、これが教育の面にも反映され、白族が誇るべき文化的伝統をもっていることが、教えられるようになると良いのではないかと私は思っている。外国人として外から見た印象ではあるが、私はそのようなことを感じた。

第四に比較の視点が重要なことが、今回も痛感された。ことにジュコフスカヤさんのオロチョンとエヴェンキとの比較は示唆的であった。オロチョンとエヴェンキは言語の系統も極めて近く、生業形態も似ており、かつ近接した地域に住んでいる。それにもかかわらず住んでいる国が違い、政治的、経済的な枠組みや条件が違う。ロシアの側、シベリアにおけるいろいろな展開、条件によって生じた相違は、中国の側のオロチョンの問題を考えるうえでもいろいろ示唆を与えるのではないかと私は感じた。このような比較はもっと盛んにまた組織的に行われる必要がある。

オロチョンのことが出たので、この機会に一つ触れておきたいことがある。それは昨年、1996年にオロチョンのところで狩猟が禁止されるようになった、ということが先程の洪時榮さんの報告にもあった。私はこれを聞いて、これはたんなる経済問題や環境保護の問題だけではないと思った。というのは、カナダのイヌイトつまりエスキモーの例を思い出したからである。彼らのところでは海獣狩猟が伝統的な経済活動であった。ところが現在では、その経済的な重要性は少なくなってきた。それでもイヌイトの男たちは海に出て、海獣に向かって鉄砲を打つことをやめない。それが彼らの生き甲斐だからである。これによって彼らのアイデンティティが守られているのである。そこで私

が思うのは、同様に狩猟の長い伝統をもつオロチョンの場合にも、同様なことは起きないのだろうか、ということである。もちろん、起きないかもしれない。しかし比較という視点からすると、そういう可能性が考えられるのである。アイデンティティについて先程、毛里さんは政治的アイデンティティと文化的アイデンティティを区別された。これはもっともな区別である。しかし問題によっては、もっと細かく分ける必要があるかもしれない。カナダのイヌイトの場合、問題になっていたのは、男のアイデンティティ、狩人としての男のアイデンティティなのであった。鉄砲を打たなければ生き甲斐がないというのは、男のアイデンティティである。女のアイデンティティではない。つまり民族のアイデンティティという場合、民族の誰のアイデンティティなのか、というもう少し細かい見方も必要である。その意味でアイデンティティの研究もさらに彫琢が必要であろう。

第五として具体的な提言がある。つまり、今回のシンポジウムでは、こういうことをしたら良いだろう、といういくつかの積極的な提言があった。つまり問題解決策のための提言である。たんなる現状分析や、また過去の出来事や状態についてこういう要因が働いていたという分析にとどまらず、将来に向かっての具体的な提言が行われた。私はこれは大変良かったと思っている。このような提言に耳をかすか、あるいはさらに進んで採用するかは、当事国の問題であって、我々外部のものがとやかく言うべき問題ではないかも知れない。それにも拘わらず、研究者として、たんに現状や過去の記述や分析に止まらず、学問的な論拠にもとづいて、積極的に問題解決のための提言を行うことは良いことであるし、望ましいことであると考えている。たとえばヘーベラーさんからは、連邦制とかもっと細かい法律が必要だという提言があった。喬健さんからは文化的カウンセリングの必要が提言され、グラドニーさんからは、イスラム地域では男女共学ではないほうがよいのではないか、という提言があった。将来のために、こうしたらよいのではないかという具体的な提言が行われたことは、私はこのシンポジウムのおおきな収穫ではないか、と思っている。繰り返して言うが、これはあくまでも他所の者からの提言であり示唆であって、それをどう受け止めるかは、当事国の問題である。

最後に、つまり第六に、このシンポジウムで取り上げた事例の範囲の問題がある。このシンポジウムでは東アジアことに中国の民族問題に焦点をあてたシンポジウムであった。しかし遠く西方のコーカサスについてのアルチュノフさんの報告もあり、日本のアイヌ問題についての塚和義さんの報告もあった。これは大変よかったと思う。つまり中国の少数民族だけに事例を限ってしまうと、どうしても枠組みが狭くなる。東アジアの民族問題を考える場合、もっと広い枠組みが必要なのではないか。その意味で、コーカサスやアイヌの事例が取り上げられたことは、枠組みを広げる意味で大変適切であった。

その枠組みを広げるという意味では、今回のシンポジウムにはやはり重要なものが一つ落ちていた、と私は思った。それは在日韓国人・朝鮮人の問題が取り上げられなかつ

たことである。彼らは人口から言って、アイヌよりもはるかに多く、何代も日本に住んでいる。そして近い将来に朝鮮半島にみな帰るといふようなことは考えられない。これからも引き続いて住んで行くものと思われる。アイヌと比較してみると、在日韓国人・朝鮮人はたんに人口規模において違うばかりでなく、他にも重要な相違がある。それはアイヌが先住民であり、日本の外に母国をもたないのに対し、在日韓国人・朝鮮人は比較的新しく渡来した人たちであり、かつ日本の外に母国をもっていることである。つまりかなり特徴のある民族問題がここにあるのである。今回のシンポジウムは私が挙げたような、いろいろ大きな収穫があった。しかしそれと同時に、これは研究の終わりではない。むしろ、まだ研究の初期の段階にあるともいえる。しかも、少数民族の現実自体がつねに変化しており、新しい問題も生まれてくる。今後の研究の発展が期待される。その場合、今回のシンポジウムが、今後の研究にとって大きな手掛かりとなり、出発点になることを期待し、また確信している。